

扉 INTERVIEW  
開く

法政大学



法政大学総長・江戸文化研究者  
田中優子

Yuko Tanaka

江戸文化を多角的に研究した『江戸の想像力』『グローバルゼーションの中の江戸』などの著書や、TV情報番組のコメントーターとして知られる「江戸学」の泰斗田中優子氏が、二〇一四年春、法政大学総長に就任した。一五学部、学生約二万七〇〇〇人、専任教員七〇〇人以上、職員四〇〇人以上という大規模大学を、グローバル時代に向け、いかに改革していくか。その手腕に注目が集まっている。今、我々は何を学ぶべきか。江戸文化の教訓を交えながら、田中氏が語る。

# 江戸に学ぶ、グローバル時代を「生き抜く」知恵

## スーパードグロバール大学(注1)として

### 「持続可能社会の構築」を目指す

——法政大学の総長にご就任されてから半年。大変お忙しいと思いますが、今のお気持ちをお願いします。

バル競争の真ただ中にいます。総長の目指すグローバル化とはどのようなものでしょうか。

ローバル社会を自分たちの問題として受け止め、生き抜いていく力を身に付けなければなりません。

学生も、英語力は必要ですが、それ以上に、その英語で何を話すのか、何を表現していくのか、学生それぞれが課題を持ち、世界中どこに行っても「生き抜いていく人」に育ってもらえればと思います。

田中 ようやく一段落ついた気がしますが、総長に就任したのは四月ですが、実質的には総長選後の昨年十二月から総長としての広報活動が始まっていて、今年度からの大学運営に向け、様々な準備作業に忙殺されてきました。実は、おかげさまでつい先日、文部科学省から「スーパードグロバール大学」として選定されました。今後一〇年間補助金を頂いて運営していく大規模プロジェクトだったのですが、これでスタートに向けた体制作りという意味では、ひと山越えたところですね。

田中 法政大学が「スーパードグロバール大学」に選定されたポイントでもあるのですが、これからのアジアを見据えて「持続可能社会の構築」を柱としています。日本は少子高齢化が進む一方で、アジアはこれからどんどん人口が増えていきます。そうしますと気候変動などの自然科学系の問題だけでなく、人口面でバランスの悪い社会がやってくる。社会の持続性を保つためには、このアンバランスを解消するため日本とアジアの交流が一段と活発になってくるでしょう。学生たちは卒業したら世界中のどこに行くかわからない。日本にいても日本語ができない外国人が企業の中に入ってくる。学生はこうしたグ

また、こうした国際交流が常態化した社会が持続していくためには、相互に多様な文化を尊重することが大切です。今世界中で、宗教や文化の違いを無視し一元的な社会に収斂しゅんさせようとする動きが強まっているように思います。しかし、こうした体制を作ってしまうと、どこかで社会的な混乱が生じます。文化の多様性を認めないと、結局安定は作れないのです。

——「生きる」ではなく「生き抜く」という点に厳しき、力強さを感じます。

田中 それだけ今は危機的な状況にあると感じています。大学はこれまでの研究で得られた知識を教えてきましたが、今まで誰も経験したことがない社会においては、従来の知識では対応できません。「誰かがこう言ったから」といってそれを信じていてもうまくいかない。親御さんの「大手企業に就職しなさい」という指示だけを聞いていたら生き抜けない。大企業で何十年も働いていられるなんてことはもうないわけですから。

——すでに学内でも、グローバル化を軸とした運営指針を出されていますが、どの大学もグロ

——「生き抜く力」を育てるため

注1／スーパードグロバール大学 文科省の「スーパードグロバール大学創成支援制度」の対象大学。文科省より、本邦の高等教育の国際競争力向上を目的とし、重点支援が行われる。

注2／往來物 明治初期までの手紙形式の初歩教科書の総称。「往來」とは手紙のやり取りの意味。江戸時代には、庶民文化や経済の発達に応じて「商売往來」「百姓往來」「職人往來」等多様なものが作られた。

注3／御家流 江戸幕府の公用書体。鎌倉時代の末の尊円親王を祖とする書の流派である。「青蓮院流」の末流。室町時代以降武家で用いられ、江戸時代に寺子屋を通じて全国に普及した。

注4／葛飾北斎（一七六〇～一八四九）江戸時代末期の浮世絵師。自称「画狂人」。和漢洋のあらゆる画法を習得し、役者絵を始めとした幅広い分野を描いた。代表作は「富嶽三十六景」「北斎漫画」等。



たなか・ゆうこ ● 1952年生まれ。神奈川県出身。74年、法政大学文学部卒業。77年、同大学大学院人文科学研究科修士課程修了。80年、同大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。江戸時代の文学、生活文化、アジア比較文化を専門とし、86年、『江戸の想像力』（筑摩書房）で芸術選奨文部大臣新人賞受賞。2000年、『江戸百夢』（筑摩書房）でサントリー学芸賞、芸術選奨文部科学大臣賞受賞。05年、紫綬褒章受勲。03年、法政大学社会学部教授、12年、同大学社会学部長、14年、同大学総長に就任。

## 「個が連なっていく」、江戸の「寺子屋」に学ぶべきこと

——ところで、総長の二本を拝見していると、江戸時代は実はグ

ローバリゼーションの中にあつて、長崎を通じファッションなどに外国の影響が相みられたとのお話に驚き、また文化面では予想外に「個」の存在が大きい役割を果たしていたとの印象を持ちました。教育に関して江戸時代において参考になる点がありますか。

田中 ありますね。例えば「寺子屋」。当時は「手習い」と言っていたんですが、あれは大人数を集めているけれども、実は家庭教師のようなものなんです。机がきちつと並んでおらず、一人ひとり違った方向を向いて違ったことをやっている。誰も先生を見ていない。学級崩壊していますね(笑)。

——個人のレベルに合ったものをそれぞれが学んでいるということですか。

田中 その通りです。たくさん生徒はいるけれども、先生がその子の年齢、能力に合わせて教科書を組み合わせ、個人授業をしています。

す。そして当時の教科書の基本は「往來物」(注2)、つまり手紙文です。大人になるためには手紙を書ける必要がある。彼らは手紙を書くことを一番大切にしていました。

——コミュニケーションですね。

田中 もちろん、武士の子弟は論語なども学びますが、手紙は必需でした。手紙が書ければ、普段の挨拶などに困らないだけでなく、日本全国どこの人ともコミュニケーションができます。当時の手紙は、全国どこでも「御家流」(注3)という同じ字体が使われていました。手紙さえ書ければ、かなり方言がきつなくても話が通じたのです。

——豊臣秀吉や徳川家康の手紙文が有名ですが、庶民の間でも手紙文を重視していたんですね。

田中 生きていくために必要だったんです。商人はもちろん、農民も、織物や手漉きの紙を商人が買い取りに来ますから、コミュニケーション力が必要になって

に、何を身につけるべきとお考えですか。

田中 組織の中でうまくやっていく力より、違う背景を持つ人と出会ったときに、ちゃんと自分で考えて対話できる力の方が大事になってきます。スピード感を持つことも大切ですね。何年もかけて考えていては、今の状況に対応できません。早く情報を得て、早く考えを出さなければ。

そのためには、教育体制を変えなければならぬ。大人教室の講義形式の授業では、学生は受け身のことしかできません。授業時間や単位数の制限があるので、いきなり変えるわけにはいきませんが、大教室授業でもグルー

プに分けて議論させるなどの試みを以前から始めています。そして、最終的には少人数型のゼミ主体の体制にシフトしていくことを目標にしています。

——教育研究者側の対応も課題ですね。

田中 確かにその通りです。グローバル化対応にあたって、まず解決を迫られているのは英語での授業です。教えるための英語となると現時点では一部の教師しかできません。が、潜在的にできる教師はたくさんいます。研修などの体制づくりが必要ですが、先生方は積極的に取り組む意欲を持ってくれています。

注5 歌川広重初代(一七九七～一八五八)江戸時代末期の浮世絵師。代表作は「東海道五十三次」(名所江戸百景)等。オランダ出身の画家コッホは、名所江戸百景の「亀戸梅屋舗」大はしあたけの夕立を模写するなど、広重から大胆な構図・遠近法に影響を受けたとされる。

注6 十返舎一九(一七六五～一八三二)江戸時代後期の戯作者。町同心の次男。代表作は「東海道中膝栗毛」。

注7 鈴木春信(一七二五～一七七〇)江戸の裕福な趣味人たちの要望を受けて錦絵(多色摺木版画)が誕生すると、その第一人者となる。代表作「雪中相合傘」(夜の梅「おせんの茶屋」等)。

注8／葛屋重三郎（一七五〇～一七九七）江戸時代の版元（出版人）。洒落本・黄表紙の山東京伝、浮世絵師の喜多川歌麿や東洲斎写楽などの斬新な企画を売り出した。また、戯作者十返舎一九や小説家曲亭（瀧沢）馬琴（代表作「南総里見八犬伝」）も葛屋の世話を受けている。

注9／東洲斎写楽（生没年不詳）一七九四年五月頃から翌年三月までのわずかに一〇月弱の間に版元葛屋から一四〇種前後の役者絵等を売り出した浮世絵師。代表作「市川鯉藏の竹村定之進」「三代目大谷鬼次の江戸兵衛」等。

注10／喜多川歌麿（一七五三～一八〇六）当初は黄表紙、洒落本の挿絵画家であったが、一七八一年頃より、版元葛屋と知り合い、歌麿と改名し、狂歌絵本、美人画の第一人者となる。代表作「ポピン」（ビードロ）を吹く娘「更衣美人図」等。

注11／平賀源内（一七二八～一七八〇）江戸時代中期の科学者、文人、戯作者、洋画家、鉱山探検、金唐革紙の発明、物産展の企画、現代でいえば広告コピーにあたる「本日土用丑の日」や歯磨き粉「漱石膏」のCMソング等も考案したとされる多才多才の人。

いました。特に江戸では、参勤交代などで、全然言葉のわからない人たちが身近に暮らしていたので、手紙文を学ぶことはとても大切だったのです。

とはいえ、寺子屋はそれぞれの子供の将来の生きる道や能力に沿って指導しており、集団指導が行われていたわけではありません。このような寺子屋社会を私は「連的な社会」と呼んでいます。連句とか俳諧のつながりのように、一人ひとり異なるけれどバラバラではなく、相互につながっている状態ですね。考え方が違う個々の才能を連携して、何かを作っていく、そういう関係性が魅力です。

——同様のことを、大学でもゼミ形式で学生たちに体感してもらおうということですか。

田中 まさにゼミは、寺子屋のようなところですね。発表も最低限盛り込むべきことはあらかじめ決めますが、中身は自分で考える。こうしたことを通じて自分を作っていくことが大切ですね。手間と時間はかかりますが、大教室で一方的に講義するような内容はインターネット等で済ませ、時間を確保して、ゼミではそれを前

提にしつかり議論する。社会学部では一部です。でにそうしたやり

## 町人文化には、「プロデューサー」がいた

方を導入しています。

——浮世絵師の葛飾北斎（注4）や歌川広重（注5）が、ジャポニズムという形でヨーロッパに広がっていったことは、非常に画期的だったと思います。こうしたことが今後、文化の多様性の中で起こることが必要だというのが、総長のお考えだと思のですが、江戸時代にそれが実現したのはなぜでしょうか。

田中 江戸時代の特徴の一つは、職人の世界、ものづくりの世界が発達したということです。例えば、浮世絵師は芸術家ではなく、下絵師、彫師、摺師ら職人の連なりの中の一人です。そして「東海道五十三次」も「名所江戸百景」も突然できたわけではなく、「こういう絵が欲しい」というお客さんの要望に職人たちが応えているうちに少しずつでき上がってきたのです。当時のお客さんは、質の高い周辺国の輸入品を目で見ている。輸入品を見ているから、

それと同じかもっと質の高いものを欲しいというわけです。職人はそれを乗り越えようとする中で、職人さんへのリスペクトが始まり、更に職人さんのやる気につながっていくんです。

——ヨーロッパでは貴族が芸術をリードし、江戸時代の日本は町人がリードしたように思いますがいかがですか。

田中 実は人口構成からいうと、決して町人は多くはないんです。農民人口が八〇％。武士と町人は残りの二〇％。江戸には、武士と町人が半々でした。職人と呼ばれる人の中にも武士出身や町人出身がいたんです。広重は武士で、北斎は町人。今、私たちが言う「町人文化」は、実は武士の教養と町人の経済力が結びついたものです。

武士と町人の融合文化が作り出された背景には、武士の貧しさがありません。日本の武士は、ヨーロッパの騎士と違って、土地を

持っていないんですね。石高制というサラリーマン社会で、かつ石高は限られていたので、黙っていても暮らしていけなかったのです。

とはいえ、武士の教養は相当なものです。能や茶の湯も理解している。例えば、十返舎一九（注6）は武士ですが、香道の天才と言われました。鈴木春信（注7）は、出身はわかっていますが、能の教養があり、能の謡をテーマにして絵を描いていることから、武士と深いつながりがあるだろうと推測されています。

これらの才能を、版元である町人がプロデューサーとなり、面白い、売れる商品を作りだすことで、膨大な量の質の高い作品が生まれました。武士と町人の「連」が成立したのです。

——現代でも、職人の技能をうまく生かすプロデューサーの存在が求められている気がします。

田中 葛屋重三郎（注8）は版元ですが、プロデューサー的な動きをして、東洲斎写楽（注9）や歌麿（注10）、北斎といった浮世絵師を生み出しました。平賀源内（注11）も藩士をやめ浪人化してまで、産業のプロデューサー活動に専念しま



注12／大田南畝(一七四九～一八三三)蜀山人として知られる狂歌師、文人。幕吏でありながら、天明年間に狂歌会のリーダーとなる。当代の狂歌を選んだ『万載狂歌集』や黄表紙評判記『菊寿草』のほか、自作の狂歌集『蜀山百首』等多数の著書を残す。

注13／狂歌 短歌の一種。滑稽、諧謔を旨とし、題材は日常生活や身近な話題も用いるなど自由。古くは万葉集からみられ、一七八〇年代に江戸で全盛期を迎える。

注14／石川淳(一八九九～一九八七)小説家。一九三六年『善賢』で芥川賞を受賞する。和漢洋にかかると博識な知識や遊芸、批判精神に裏打ちされた多くの作品で知られる。代表作は『黄金伝説』『焼跡のイエス』等。また、江戸の遊民や山東京伝等に関するエッセイを残している。

## 「個」と「連」の中で成長した学生時代

した。大田南畝(注12)は武士でありながら天才的な狂歌(注13)師で、かつ若い才能を発見しては褒めながらプロデューサー的なことをやっている。そうすると、みんな

——総長の就任時、「自分は法政

大学で人生の基盤を与えられた」というお話がありました。

田中 私は研究者ではなく物書きになろうと思って大学にいましたから、学部時代は「これだ」と思ったらくこつち、また「あれだ」と思ったらくそつちに行くということをしていました。そしてその時々たくさんのお会いがありました。文学、言語学、社会科学

な周りがすごいねと言ってくるんです。当時は、そういうプロデューサーに対するリスベクトがありました。

——好奇心の赴くままに勉強したわけですね。

田中 大学時代はそれができるんです。だから、ボヤツとしているのはもったいないですね。私が、江戸文学と出会ったのは、近代文学のゼミです。芥川賞作家の石川淳(注14)が書いた江戸に関するエッセイ(注14)を読んで「江戸時代は、こういう人たちの世界だ」とわかってしまったんです。

——江戸人が手触り感を持って見えてきたということですか。

田中 そうです。何も江戸の知識はないのに、エッセンスがわかってしまった。なぜこんな社会があるんだらう、なぜこんな人間観があるんだらうと、大学の後半から江戸時代の勉強を始めて、大学院に進みました。

——多方面からのアプローチで

江戸の実態や歴史をひもといていく、学際的なところにはどのような感じでしょうか。

田中 おそらく文学部の中に閉じこもり、ある作家について極めることを重視していたら、今のようにはならなかったでしょう。しかし、私の交友範囲は、理科系や社会科学、文化人類学の研究者まで及んでいて、その人たちと話していると、江戸についていろいろなことを質問されて答えに詰まることが多かったです。そうした外の人の質問にきちつと答えようと勉強したことが大きかったと思います。物事を理解したいと思ったときは、その中だけで見ているわけではない。外との関係を見る。そうすると必然的に学際的になってしまふんです。

——いろいろな分野の人とコミュニケーションをとりながら、その切り口を吸収し、開拓していく。まさに先ほどの「個」と「連」の概念を実践してこられたんですね。

田中 私は、自分のことを専門家だとは思いません。「これだけを専門に研究すればいい」というのではなく、人間として知りたいことを研究していると考え、垣根を

作らないようにしています。

——最後に、六大学初の女性総長として、女性が活躍するための課題をお聞かせください。

田中 環境の問題もありますが、女性自身の意識が重要だと思っています。管理職の話が来ても、責任が重いなどの理由でお断りになる女性が少なくありません。自分はこの程度の人間だ、これでもいいんだと思ってるんですね。それでは自分の能力は伸びません。ある地位、役割に就くことで、能力が引き出されることもあるので、一歩足を踏み出してほしいと思っています。

しかし、現実には、子育てによってそれが難しい場合が多いのも事実です。昇進や能力開発のキャリアパスを男性に合わせるのではなく、女性の個々の事情に合わせて遅らせて、子育て後にそうしたキャリアを進めるような柔軟な対応ができれば、必ず能力を伸ばせます。それがダイバーシティということだと思っております。

——本日は、大変参考になるお話をいただきありがとうございます。

(聞き手／情報サービス局長・丹治芳樹)